特集「ジェンダー」・論文

社会関係資本と家族要因の関連と効果
―ジェンダー論の視点から

Relation and Effect of Social Capital and Family Factors: from the Viewpoint of Gender Theory

キーワード：
　ジェンダー，社会関係資本，結束型・橋渡し型，ケア活動
keyword：
　gender, social capital, bonding and bridging social capital, care activity

新潟大学　　杉　原　名穂子
Niigata University Nahoko SUGIHARA

要　約

　本稿はジェンダー論の観点から社会関係資本（SC）の効果について実証的に検討するものである。SC研究はしばしばジェンダーブラインドであるという批判が寄せられてきた。それはSC生産活動が性別役割を強化・再生産することに無自覚であることへの批判である。本稿ではそれらの批判をふまえ，特に家族での活動およびそこでの権力作用に注目し，それらが個人が所有するSCにどのように関連しいかなる利益をもたらすか，都市の家族を対象にした量的調査から分析した。

　その結果，次のことが明らかになった。豊かなSCから多くの利益を得ているのは女性の方である。満足感，健康，娯楽活動，市民意識などとの関連をみると，男性にとっては本人が所有する経済・人的資本と家族が資産となっているのに対し，女性では自身と家族に加えネットワークが資産である。女性にとって特に，橋渡し型SCは満足感，娯楽，健康，市民意識の醸成といった利益をもたらしている。

　家族内SCは男女とも多くの面でプラスの効果をもたらしている。密な家族は家族内SCを用いてネットワークをつくる。ただし，密な家族とは協力行動を多くおこなう家族であり，女性のケア活動への大きな貢献を意味するのではない。ケア活動は女性の橋渡し型SCの構築を阻害する。つまり，家族内SCを増やすという提案は男性にはプラスの利益をもたらすが，女性の場合には橋渡し型SCの醸成を阻害しない途を探ることが必要である。

Abstract

This paper empirically clarifies the actions and effects of social capital (SC) from the viewpoint of gender theory. SC studies have been often criticized for the gender-blindness. They are unaware that SC strengthens and reproduces gender structure in some aspects. In this article, we examine from the quantitative survey of urban families, in particular, how activities and the power effects in family are related to the women's SC and how it benefits.

The results are as follows. It is women who gain many benefits from rich SC. With regard to living satisfaction, health, recreational activities and citizen consciousness, men draw profits from their own economic and human capital and family SC whereas women are benefiting from networks in addition to them. In particular, the bridging SC brings many benefits for women.

The family SC has a positive effect in both men and women. Dense families use family SC to create many networks. However, what is important is a family that carries out many cooperative actions, not women do a lot of care activities. Care activities interfere with the construction of women's bridging SC. From the above, the proposal to foster family SC brings positive benefits for men, but in the case of women, it is necessary to explore ways to build bridging SC as well as family SC.

1　はじめに

社会関係資本social capitalという概念は，1990年代にR. Putnamが操作的定義を行い「理論的抽象性から概念を救出」（Field 2008：４）して以降，多くの国で調査研究が行われている。その概念の定義が研究者により多様で，かつ政治・経済・教育・健康・治安・地域作り等，きわめて多くの領域で応用されていることから，一つの概念であまりに多くを説明しようとしすぎるとしてSC概念の有効性に疑問が示されることもある（Portes 1998；Woolcock 1998）。それでもなお，個人化や高齢化がすすむ日本社会においても，さまざまな社会問題解決の鍵を市場や国家以外の要因に求め，社会関係資本（以下SC）への注目は続いている。

SC研究の隆盛とともに，その概念の問題点も示されてきた。定義の多様性以外にも，SC概念自体が近代社会の理念である自由や平等の問題と抵触する部分があるということが，特に，ジェンダー研究やエスニック研究にたずさわるものを中心に指摘されている。A. Portesはエスニック集団の問題を例に，SCがもたらすネガティブな側面を，外部の排除，集団のメンバーへの過度の主張，個人の自由の制限，下方への規範の平準化の４点に整理している（Portes 1998：15–18）。本稿ではSC研究がジェンダー・ブラインドであるというこれまでの批判をふまえ，SCがもたらす効果についてジェンダーによる違いに注目し実証的なデータにもとづき明らかにする。政治活動や就業などの問題についてはすでに研究があるが，本稿では特に，個人の所有するSC，家族要因，ジェンダーの関係を分析する。

2　社会関係資本研究とジェンダー論

2.1　権力作用の問題

SC論の代表的論者として通常あげられるのが，J. Coleman，Putnam，P. Bourdieuである。そして，彼らのSC論はいずれもジェンダー・ブラインドであると批判されている。Putnamは女性の賃労働の増加が社会全体のSCの量を減少させたと論じてフェミニストから批判されることになった。Colemanは子どもの人的資本形成には母親が子どもや学校に熱心に関わることが重要だと述べ，保守的な母親像に無条件に依拠しているとされた（O'Neill & Gidengil 2006；Field 2008；Coleman 1988=2006；Putnam 2000=2006）。

Bourdieuは主に階級問題に焦点をあて研究をすすめており，ジェンダーについてはそれほど関心を向けなかった。しかし，O'Neill & Gidengil（2006）はColeman，PutnamではなくBourdieuのSC概念がジェンダー問題には適していると述べる。

SCの定義は多様かつ曖昧であり，研究者によってさまざまに異なる。共通しているのは，人間関係や協力関係それ自体から利益が派生するという認識である。ネットワークが利益をもたらす点では多くの研究者が同意するが，そもそもなぜそのネットワークが利益をもたらすように働くのかという点については説明がさまざまにある。たとえば，ある人が所属集団から情報や援助を得られるとして，なぜ集団の他のメンバーはそのような協力行動を行うのか。Coleman，Putnamは集団をささえる規範の存在に根拠を見いだす。Colemanが合理的人間像にたち，Putnamがデュルケム的な非合理的な規範の内面化で説明するという点では違いがあるが，彼らのSCの定義にはネットワークに加えて，コミュニティと規範が含まれるのが特徴である。この理論的な特徴をみるに，コミュニティ再生論にはうけがいいが，社会や集団に存在する女性役割や男性役割を維持・強化するとしてジェンダー研究者から批判されるのも理解できる。

BourdieuがPutnamやColemanと異なるのは，その定義にコミュニティや規範を含めず，ネット

ワーク要因のみを定義としている点である。SCとは「互いに面識があり認知している多かれ少なかれ制度化された持続的なネットワークの保持―別の言葉でいえば集団におけるメンバーシップ―に結びつけられた実在のあるいは潜在的な資源」（Bourdieu 1986：248）というのが彼の定義である。Bourdieuはネットワークをささえるものを規範ではなくたえまない投資活動だと考えた。たとえば経済資本をネットワークに多く投資したものがSCを多く所有し利益を得る。このように経済資本からSCや文化資本への転換，さらに経済資本への再転換，といった資本間の転換が彼のSC論の特徴であり，そこに資本の集中と分配をめぐる権力作用の視点がうまれる。ジェンダー研究者もBourdieuのSC論に注目し，女性のSCが女性個人の政治資本や経済資本に転換されず，その日その日に消費されてしまう特性をもつことを明らかにし，女性の所有するSCの固有の性質に注目した（Lowndes 2006；Bezanson 2006）。

2.2　家族と社会の二重性

BourdieuのSC論はマルクス主義の伝統である葛藤理論の系譜に位置し，ColemanやPutnamと異なり，権力作用を扱うものであるのは確かであり，O'Neill & GidengilがBourdieuのSC定義を採用すべきというのも一理ある。しかし彼の理論は階級問題を扱ってはいるがジェンダー問題にはそれほど関心を払わない。それは，Bourdieuの権力概念もまた，公的世界にのみ焦点をあてるリベラリズムの理論枠組のうちにとどまっているからである。このリベラリズムにジェンダー研究者の多くは抵抗感を示してきた。私的世界である家族における女性のケア労働が，公的世界での女性の活動を制限することへの問題意識がそこにある。男性は個人としてコミュニティや組織に関わるが，女性は家族の中でのケア労働をもっぱら担うが故に，個人としてのみならず家族を抱えた状態で外部の集団と関係をもつ。権力作用に注目する点では階級やエスニシティ問題と共通しても，ジェンダー論がそれらと異なるのはこの点についてである。すなわち，ジェンダーの視点とは社会と家族の二重システムへの洞察を意味するとも言える。そしてこの二重システムは，男性および未婚女性よりも既婚女性に対してもっとも大きな影響を及ぼすことになる[(1)]。

ではジェンダー・ブラインドと評されたColeman，Putnam，BourdieuのSC論において，家族はどのように位置づけられていたのか整理しておこう。

Putnamの『孤独なボウリング』では家族は三つの文脈で登場する。ひとつは，家族を他の職場や労働組合といった組織と同列におき，家族内でのSC量を測定し，その量の減少を論じるものである。たとえば，夕食をとる，休暇を共に過ごす，一緒にテレビを見る，といった行為が減少し，「急速に家族の絆が弱まっている」という議論がそれである。

第二の文脈は，結婚や子どもをもつこと，女性が働くことといった家族要因が，個人的あるいはコミュニティのSCを増加させるのか減少させるのかという論点に関わる。たとえば既婚夫婦はコミュニティ活動を増加させるが友人とのインフォーマルな交流は減少させる，女性の労働市場への参加拡大はコミュニティ活動を減少させるという知見がそれである。ここでは個人や集団のSCを従属変数とし結婚や就労を独立変数として両者の関連をみている。

家族内のSCに注目し，それを独立変数とし効果を検討するのが三番目の文脈である。たとえば，よき家族はよきコミュニティをつくるといった主張がそれである。子どもの教育に関してもこの図式で説明しており，親が地域コミュニティや学校とつながりをもつこと，また強力なサポートネットワークもつこと，すなわち親の所有するSCが子どもの成績に正の効果を持っていると述べる。

教育についてのPutnamの図式はColemanの議

論から影響を受けている。Putnamは，なぜ密なコミュニティが子どもの成績に正の効果をもたらすのか，その説明にColemanを引用している。Colemanは子どもの学業達成に大きな影響をおよぼす要因として家庭やコミュニティに焦点をあてた。そして親の経済資本や人的資本（学歴）が不利な家庭であっても親のSCによってその不利は補填できるとした。そこでは親，特に母親が子どもや学校とどのように関わるかが大きくとりあげられる。

このようにみると，ColemanやPutnamは家族とSCの問題をあつかってはいるが，家族という集団内での権力関係についてはふれていないことがわかる。ではBourdieuのSCと家族についての議論はどうか。

Bourdieuにとって家族はさまざまな資本を親から子へ継承する場である。彼はおもに文化資本の家庭内相続について考察をすすめ，SCについては精緻な理論を展開しない。Colemanが家族内SCや親の人的資本としたものは，Bourdieuでは文化資本概念に含まれていると考えられる。BourdieuにおいてSCはネットワーク，すなわち人脈やコネといったニュアンスが強く，どちらかというと家庭外で作用するものである。ジェンダーとSCとの関係でいえば，女性は「象徴的道具」であり，所属集団の社会関係資本や象徴資本の蓄積・増幅の役割を担っており，それによって集団の地位を生産していると述べる（Bourdieu 1990）。

このように，彼の理論では女性の所属集団への貢献が自明視されており，女性がSC生産に主にたずさわっていること，それが所属集団の資産となっていることには触れているが，それが女性個人にとってどのような利益をもたらしているかは触れていない。この点ではコミュニティや所属集団でのSC生産に女性が多くたずさわり，「女性の方が男性よりも熱心な社会関係資本家だということである」（Putnam 2000=2006：109）としたPutnamと実は共通している。そこでは集団内（家族内）でのジェンダー権力作用について触れられていないのである。

以上の議論をふまえ，本稿ではSC論にジェンダーの視点を導入することを目指し，次の点を理論および分析枠組に組み入れる。まずSCを共同体や集団レベルでなく，個人レベルで測定する。第二に規範やコミュニティをSCの定義に含めず，個人が取り結ぶネットワークをSCの定義とする。第三にSCの効果を考える上で，家族要因を導入し，その関連を分析する。最後に家族要因の中に権力作用に関するものを組み入れる。すなわち，家族要因および家族内での権力作用が個人の所有するSC量にどのように関係するか，それがどのような効果を個人にもたらしているかを本稿の課題とし，量的調査データを用い検討する。

3　調査データと定義

3.1　調査の概要

まず，分析に用いる調査の概要について説明する。調査地として東京都世田谷区および新潟県新潟市の住民を対象に行った量的調査のデータを用いる。この両地域は都市部である点では共通しているが，世田谷区はコミュニティ活動に女性が男性よりも積極的に参加するのに対し，地方都市である新潟市は地縁血縁関係が首都圏にくらべて残っており，男性が豊かな地縁・血縁ネットワークを築いているという違いがある。異なるコミュニティ特徴をもつ都市型家族が住む両地域を対象としたデータを使用する。

新潟市については2012年３月–５月，世田谷区は2015年３月–５月に，住民基本台帳より抽出した対象者に調査票を郵送で配布・回収する形式で行った。世田谷区は２段抽出法により抽出した2,089人（20歳～84歳の男女）を対象とし有効回収票は576（回収率27.6%），新潟市は系統抽出法により抽出した3,070人（20歳～89歳の男女）に

対し郵送し，有効回収票は1,315（回収率42.8%）である[(2)]。

3.2　回答者の属性

調査地の特性を表１に，また回答者の属性を表２に示す。世田谷区は戦後特に開発・発展した地区であり，住宅街，商業地などが混在する一方，緑も比較的多い。本調査で「他の地域生まれである」と回答した者が男女とも７割以上をしめ移住者が多い。学歴も新潟市より高く，余裕のある暮らしをおくれていると回答する人が多い。

新潟市は2005年に周辺地域と大合併を行い，2007年に政令指定都市になった。そのため，伝統的な住民が多く住む地区，開発による新規来住者が多い地区，農村や漁村など，さまざまな地区をもつ。人口規模では世田谷区とそれほど違わないが，人口密度は大きく異なり，平均世帯人員数も世田谷区より大きい。また高齢化率も高く単身

表１　調査地の特性

	世田谷区	新潟市
総人口	903,346	810,157
（うち男性）	428,874	389,512
（うち女性）	474,472	420,645
高齢化率	20.4	27.0
世帯数	465,351	321,511
平均世帯員数	1.94	2.52
単身世帯	49.9%	32.4%
高齢者世帯	16.8%	19.3%
人口密度	15101.2	1118.2

（2015年国勢調査による）

表２　調査対象者の属性

		年齢			この地区生まれ	職業			
		20-30代	40-50代	60代以上		雇用者	自営・家族従業員	臨時・パート	無職
世田谷区	男性	48	84	104	57	93	60	13	40
		20.3%	35.6%	44.1%	25.1%	40.0%	25.9%	5.6%	17.2%
	女性	92	132	115	60	86	31	67	117
		27.1%	38.9%	33.9%	18.2%	25.7%	9.3%	20.0%	34.9%
新潟市	男性	98	172	286	255	246	86	31	150
		17.6%	30.9%	51.4%	47.0%	45.4%	15.9%	5.7%	27.7%
	女性	167	215	360	275	157	57	130	315
		22.5%	29.0%	48.5%	37.8%	22.1%	8.0%	18.3%	44.3%

		学歴			主観的豊かさ*
		中学・高校	短大・高専	大学・大学院	余裕のある暮らしができている
世田谷区	男性	44	27	164	158
		18.7%	11.5%	69.8%	67.8%
	女性	77	115	147	219
		22.7%	33.9%	43.4%	64.8%
新潟市	男性	335	69	148	257
		60.7%	12.5%	26.8%	46.4%
	女性	460	197	82	391
		62.2%	26.7%	11.1%	53.1%

＊「経済的に余裕がある暮らしができているか」という質問に４件法で回答してもらい，「そう思う」「まあそう思う」という回答を合計したもの

世帯が少ないのが特徴である。本調査でも回答者の年代を見ると世田谷区に比べて高齢者の比率が高い。地元生まれの人間はおよそ４–５割弱であった。高年層が多いせいか，就労状況についても世田谷区より無職と回答するものの比率が高い。

3.3　指標の操作的定義

まず，本稿で用いるSC概念の操作的定義を行う。ここでのSCは個人が所有するネットワーク要因とし，規範およびコミュニティ要因をはずす。用いる質問文は「あなたは，日常生活の問題や心配ごとについて，相談したり頼ったりする人や組織がありますか。」である。10個の項目について４件法でたずねたが，それを「頼りにしている」から「ほとんど頼りにしていない」まで４から１にスコア化し，因子分析を行った（表３）。

自治会，区役所，ボランティアやNPO，近所の人，学校や病院などの公的施設は地縁ネットワークとみなし，親戚・家族の血縁ネットワークとあわせてここでは結束型SCとする。NPOが結束型に入るのが特徴的であるが，これは地域活動にかかわるNPOに参加している人が多いからだと推測する。

残りの３項目，すなわちインターネット，その他の友人・知人，職場や仕事関係の人を橋渡し型SCとする。２種のSCはそれぞれの項目のスコアの総和で計算した。なお，結束型SCと橋渡し型SCの相関は0.305（$p<0.001$）である。

次に本稿のテーマである家族要因の定義を行う。ここでは家族の凝集性をはかるものを家族内SCとして分析に導入する。同居している家族に限定し，「次のような活動を家族と一緒に行うことはありますか。」という質問を趣味やスポーツ活動，外食や買い物，地域活動の３項目について行った。５件法でたずね，５～１でそれぞれスコア化し，その総和を家族内SCとする。数字が高いほど密な家族だと考えられる[(3)]。

さらに家族内での権力作用をはかるものとしてケア活動関連時間をとりあげる。E.F. Kitty（1996）が女性の依存労働（ケア労働）がもっとも主要な問題であるとしたように，家庭での中心的な問題とされるのをふまえて導入した。平日に家事・育児・介護に費やす時間をたずね，実数値（分）をケア活動指標とする。

なお，家族要因を考慮することから，以下の分析では単身世帯を除外し同居する家族がいる回答者のみを対象とする。世田谷区469, 新潟市1,184, 合計1,653サンプルとなる。

それぞれの指標の性別差を表４に示す。個人が所有するSCでは橋渡し型のみ女性の方が男性より多い。「その他の知人･友人」で男女差が大きく，友人とのインフォーマル・ネットワークに関して女性の方が充実していることに起因する。この点はPutnamの主張と共通する。また，家族要因に

表３　相談先・頼りにしているものの因子分析

	因子			
	1	2	3	
自治会等の地縁組織	.807	.156	-.047	結束型SC
区役所	.644	.063	.193	
ボランティアやNPO	.566	.070	.176	
近所の人	.565	.314	-.050	
学校、病院等の公的施設	.561	.118	.216	
親戚	.253	.725	.068	
家族	.077	.597	.194	
インターネット	.030	-.043	.504	橋渡し型SC
その他の友人・知人	.102	.249	.487	
職場や仕事関係の人	.184	.230	.462	

因子抽出法：主因子法　　ﾊﾞﾘﾏｯｸｽ回転

表４　SC指標の性別差

性別		度数	平均値	標準偏差	t 検定
結束型SC	男性	603	16.2	4.1	ns
	女性	803	16.3	3.9	
橋渡し型SC	男性	589	6.5	2.1	**
	女性	766	6.9	2.1	
家族内SC	男性	615	6.5	2.3	ns
	女性	794	6.7	2.3	
ケア活動（分）	男性	605	74.4	116.8	***
	女性	962	259.9	237.8	

***p.<0.001，**p.<0.01

ついてはケア活動時間に大きな違いがあり，女性４時間20分，男性１時間14分である。他方で家族内SCについて男女差はない。なお，これらの特徴は地域別にみても同様の結果であった。

４　社会関係資本と家族要因

4.1　結束型・橋渡し型SCと家族要因との関連

それでは個人が所有する２つの型のSCは家族内SCやケア活動とどのような関係があるか。両者の関連をみるために年代別に相関係数を算出したのが表５である。

これをみると，総じて家族要因は本人が所有するSCと関連を示す。家族との関わりが豊かな方が，地縁や血縁，さらには橋渡し型のネットワークも豊かであり，家族を通したSC構築が認められるといってよい。

ただし，性別によって両者の関連の仕方に違いがみられる。

男性では家族要因とSCとの相関が年代によって異なるのがわかる。育児期世代では家族内で共にする活動が多い方が，またケア活動に関わって

表５　SCと家族要因との相関　性別・年代別

			20-30代		40-50代		60代以上	
			家族内SC	ケア活動	家族内SC	ケア活動	家族内SC	ケア活動
男性	結束型SC	Pearson の相関係数	.310**	.214*	.173*	.075	.097	.084
		有意確率	.001	.023	.014	.295	.163	.251
		度数	106	113	201	197	209	187
	橋渡し型SC	Pearson の相関係数	.154	.072	.185**	.049	.161*	-.030
		有意確率	.109	.441	.009	.497	.025	.691
		度数	109	118	197	196	194	175
女性	結束型SC	Pearson の相関係数	.246**	.258***	.173**	.173**	.263***	.127
		有意確率	.001	.000	.004	.003	.000	.060
		度数	192	226	270	292	192	221
	橋渡し型SC	Pearson の相関係数	.150*	-.209**	.159*	-.025	.314***	.000
		有意確率	.039	.002	.011	.675	.000	.998
		度数	190	224	259	281	171	201

***p.<0.001，**p.<0.01，*p.<0.05
塗りつぶしは有意な相関があるもの

いる男性の方が結束型SCを多く所有している。育児が一段落すると思われる中年期では，家族内SCはむしろ橋渡し型SCと関連するようになる一方，ケア活動時間は関連を示さなくなる。すなわち，男性の場合は子どもが小さい場合は家族を通してコミュニティに関わるが，子どもが成長するにつれて家族を通した活動はコミュニティと関連を示さなくなる。

他方，女性の場合は男性よりも家族要因と本人が所有するSCの関連が多く認められる。密な家族は結束型・橋渡し型両方のSC量と正の相関を示す。ただしケア活動時間は子育て世代では結束型SCを豊かにしているが，橋渡し型SCとはマイナスの相関を示している。乳幼児期が多い年代と思われる20–30代ではケア活動時間が橋渡し型SCの形成を阻害していることがわかる。

4.2　社会関係資本と家族要因のもたらす効果

SC論の抱える課題の一つが循環論の問題である。すなわち原因と結果が論理的に確定できない場合がある。本論でもSCがもたらす効果として満足感や孤独感などを従属変数とし検討するが，変数によっては時間的先行を確定するのは難しい側面がある。その問題をふまえた上で，ここでは因果関係の図式を採用する。

用いる独立変数は年齢，学歴[(4)]，主観的豊かさ[(5)]，就労ダミー（役員，臨時パートも含め就労しているもの＝１，無職・その他＝０），結束型SC，橋渡し型SC，家族内SC，ケア活動時間とする。以下，それぞれの従属変数ごとに回帰分析をおこなった結果を示す。

4.2.1　生活満足感と孤独感

豊かなSCは充実した豊かな暮らしと関わるのか。SCが生活満足感に効果をもたらすかを検証するため，「自分の生活に満足していますか」という質問への回答を従属変数とし，重回帰分析を行った[(6)]。

表６から男女とも経済的豊かさが非常に強い効果を示していることがわかる。係数の高さから経済力の重要性がわかるが，それ以外に男女とも家族内SCが正の効果を示している。密な家族を築いている方が満足感が高いのである。それに加え，女性の場合は結束型SCも関連を示している。

この逆が孤独感との関係である。「孤独や寂しさを感じることはありますか」という質問に対する回答を「よくある」「時々ある」を１，「あまりない」「ほとんどない」を０とリコードして二

表６　生活満足感の重回帰分析

	男性				女性			
	標準化されていない係数		標準化係数		標準化されていない係数		標準化係数	
	B	標準誤差	ベータ	有意確率	B	標準誤差	ベータ	有意確率
（定数）	-2.599	.914		.005	-2.455	.539		.000
年齢	.014	.006	.187	.020	.003	.004	.043	.447
主観的豊かさ	.469	.076	.404	.000	.466	.051	.419	.000
学歴	-.062	.056	-.076	.271	.007	.032	.010	.834
就労ダミー	.325	.175	.134	.065	-.118	.098	-.059	.227
結束型SC	.035	.022	.119	.113	.034	.013	.132	.012
橋渡し型SC	-.020	.045	-.037	.655	.029	.027	.062	.280
家族内SC	.100	.033	.205	.003	.044	.020	.103	.031
ケア活動	-.001	.000	-.086	.199	-9.291E-05	.000	-.025	.595
調整済 R2 乗	.292				.255			
n	179				389			

塗りつぶしは有意な効果があるもの

項ロジスティック回帰分析を行った結果が表７である。男女とも家族内SCがマイナスの効果を示している。このように見ると，男性は家族，女性は家族と地縁・血縁関係が生活に重要な意味をもっていることがわかる。男性は職場の比重が高いせいか家族中心のつながりとなっている。国際比較調査において，日本社会では家族・親族以外の人間関係が弱いことが報告されている[(7)]。この家族中心の絆は特に高年男性の孤立の問題を引き起こしているが，今回の調査でもその傾向がみてとれる。

4.2.2　健康および娯楽・リクリエーション

同様に健康状態と娯楽・リクリエーション活動について二項ロジスティック回帰分析したものが表８と表９である。女性の場合は家族内SC以外に特に橋渡し型SCにプラスの効果がみられる。満足感の場合は地縁・血縁ネットワークに関する

表７　孤独感の二項ロジスティック回帰分析

	男性				女性			
	B	標準誤差	有意確率	Exp(B)	B	標準誤差	有意確率	Exp(B)
年齢	-.018	.013	.159	.982	-.017	.008	.049	.984
主観的豊かさ	-.425	.168	.011	.654	-.091	.109	.403	.913
学歴	.146	.120	.224	1.157	-.095	.071	.180	.909
就労ダミー	-.183	.375	.626	.833	-.206	.216	.341	.814
結束型SC	-.010	.044	.820	.990	-.015	.029	.598	.985
橋渡し型SC	-.024	.098	.802	.976	.008	.059	.894	1.008
家族内SC	-.195	.070	.006	.823	-.123	.046	.007	.884
ケア活動	.000	.001	.615	1.000	.000	.000	.304	1.000
定数	1.132	1.883	.548	3.102	3.187	1.184	.007	24.205
-2 対数尤度	273.735				619.606			
Nagelkerke R2 乗	.138				.052			
n	231				472			

塗りつぶしは有意な効果があるもの

表８　「健康」の二項ロジスティック回帰分析*

	男性				女性			
	B	標準誤差	有意確率	Exp(B)	B	標準誤差	有意確率	Exp(B)
年齢	.004	.015	.797	1.004	.017	.011	.137	1.017
主観的豊かさ	.946	.221	.000	2.576	.330	.146	.024	1.391
学歴	-.072	.139	.605	.931	.007	.091	.935	1.007
就労ダミー	.488	.423	.249	1.629	1.083	.297	.000	2.954
結束型SC	.037	.054	.494	1.038	-.080	.040	.045	.923
橋渡し型SC	-.010	.115	.927	.990	.208	.086	.015	1.232
家族内SC	.026	.080	.743	1.026	.153	.064	.016	1.166
ケア活動	-.002	.001	.066	.998	.000	.001	.363	1.000
定数	-.796	2.204	.718	.451	-1.769	1.551	.254	.170
-2 対数尤度	207.831				386.604			
Nagelkerke R2 乗	.197				.135			
n	232				471			

塗りつぶしは有意な効果があるもの

＊従属変数は「この１年間の健康状態はおおむねいかがでしたか」という問いに「良好」「まあ良好」を１，「あまり良好ではない」「良好でない」を０とスコア化したもの

表９　娯楽活動の二項ロジスティック回帰分析*

	男性				女性			
	B	標準誤差	有意確率	Exp(B)	B	標準誤差	有意確率	Exp(B)
年齢	-.010	.013	.429	.990	.008	.009	.356	1.008
主観的豊かさ	.534	.166	.001	1.706	.256	.116	.027	1.292
学歴	-.243	.119	.040	.784	.104	.075	.169	1.109
就労ダミー	-.232	.363	.522	.793	-.211	.230	.359	.810
結束型SC	-.059	.044	.179	.942	-.005	.031	.876	.995
橋渡し型SC	.099	.095	.296	1.104	.143	.065	.027	1.153
家族内SC	.244	.069	.000	1.276	.328	.052	.000	1.388
ケア活動	.000	.001	.577	1.000	-.001	.000	.095	.999
定数	1.278	1.833	.486	3.590	-4.819	1.281	.000	.008
-2 対数尤度	288.995				563.144			
Nagelkerke R2 乗	.175				.215			
n	232				471			

塗りつぶしは有意な効果があるもの

＊従属変数は「日ごろ，娯楽やレクリエーション活動を十分に行えていると思いますか」という問いに「十分にできている」「まあまあできている」を1，「あまりできていない」「ほとんどできていない」を０とスコア化したもの

結束型SCが効果をみせたが，健康と娯楽のような個人的な活動や要因の場合は橋渡し型SCが重要となる。男性では階層変数と家族内SCが有意となるのに対し，結束型・橋渡し型のSCは効果を見せないのも特徴である。男性は個人と家族，女性は個人と家族とネットワークという図式がここでも生活満足感と同じくあてはまっている。

4.2.3　政治・市民意識

PutnamがSC問題に関心を向けたのは，アメリカ社会を伝統的にささえてきた市民活動や市民意識が衰退しているという危機感による。彼はSCの量が減少していることをさまざまなデータを用いて論証したが，特に結束型よりも橋渡し型SCを重視する。すなわち，アメリカ社会のSC量が減少していることに警鐘をならすといっても，必ずしもテンニースのゲマインシャフト的なつながりの再構築ではなく，近代社会の市民的なつながりをSC論で強調したのである。

SCが閉鎖性を強化し，外部への排他性をうみだすのではないか，あるいは絆の強調は個人の自由を抑圧するのではないか，という疑念はSC論に対して常につきまとう。Putnamはこれに対し，SCは自由や平等と両立可能であり，SCはむしろ他者への寛容性を生み出すと述べる。「社会参加と寛容性の間の相関は，存在するとすれば正であって負ではなく，教育水準を統制してもそれは成り立つ。つながりと寛容性の間にある正の関連は，特に男女問題と人種問題において強い。コミュニティ組織への関与が強まるほど，男女平等や人種統合に対してよりオープンになる傾向がある」（Putnam 2000=2006：437–438）。

Putnamが述べるようにSCは寛容性を高めるのであろうか。ここでは，政治・市民意識との関係をみることにし，「さまざまな社会問題について関心がありますか」「選挙（国政選挙および地方選挙）があると投票に行きますか」という二つの質問から合成変数をつくり，政治・市民意識の指標とした。それぞれの質問に４件法で回答してもらい，それぞれ熱心な方から４～１でスコア化し合算した。それを従属変数とし重回帰分析を行った結果が表10である。

年齢を重ねることが政治問題や社会問題への関心を高めている点では男女とも共通しており，

表10　政治・市民意識の重回帰分析

	男性				女性			
	標準化されていない係数		標準化係数		標準化されていない係数		標準化係数	
	B	標準誤差	ベータ	有意確率	B	標準誤差	ベータ	有意確率
（定数）	1.973	.944		.038	1.208	.652		.064
年齢	.035	.006	.442	.000	.030	.005	.353	.000
主観的豊かさ	.029	.083	.022	.728	-.011	.061	-.008	.859
学歴	.134	.060	.152	.027	.143	.040	.172	.000
就労ダミー	.229	.184	.089	.216	-.046	.120	-.018	.703
結束型SC	.019	.023	.064	.395	.042	.016	.130	.010
橋渡し型SC	.078	.049	.138	.109	.072	.033	.122	.028
家族内SC	.026	.034	.049	.452	.086	.025	.157	.001
ケア活動	-2.109E-05	.000	-.003	.959	.000	.000	.073	.106
調整済 R2 乗	.131				.175			
n	192				415			

塗りつぶしは有意な効果があるもの

もっとも大きな効果を示している。生活満足感では階層変数のうち経済的豊かさが関連したが，市民意識については学歴が関係しているのも特徴的である。

SCについてはジェンダーにより効果が異なる。女性において結束型SC，橋渡し型SC，家庭内SCが投票行動や社会問題への意識に効果を示している。これに対し，男性ではSC要因は効果を示さない。やはりここでも，女性では個人，家族，さまざまなつながりが，男性では個人的要因が意味をなしている。女性はネットワークや密な家族をつくることで得られる利益が男性より大きいのである。

4.2.4　性別役割意識

社会問題への関心が高いことと男女平等への意識が強いことは同列には論じられない。ジェンダー意識とSCの関係については因果モデルを構築するのが難しいため，ここでは相関関係をみてその問題を検討する。

表11は性別役割意識の指標と各SCの偏相関係数を示したものである。統制変数は年齢と学歴とした。性別役割意識は，男女の分業に関する賛否と男女の権力関係に関する賛否を問う項目を合成した変数である[(8)]。数字が高い方が性別分業に賛成であり女性が補助的な仕事をすることに賛成する意識が強い指標である。これを見ると，男性ではケア活動時間が長いもの，女性では橋渡し型SCが多いものにおいて，ジェンダー平等意識が

表11　性別役割意識とSCの偏相関係数（統制変数：年齢・学歴）

性別			結束型SC	橋渡し型SC	家族内SC	ケア活動
男性	性別役割	相関係数	.043	-.056	.017	-.191
	意識	有意確率	.623	.520	.844	.029
		df	130	130	130	130
女性	性別役割	相関係数	-.025	-.131	-.118	-.081
	意識	有意確率	.705	.046	.075	.219
		df	228	228	228	228

塗りつぶしは有意な相関があるもの

強いことがわかる。男性ではより家庭の義務的な仕事に関わるもの，女性では地縁・血縁ではなく個人的なネットワークを築いているもの，すなわち社会の性別分業構造から離れることと平等意識が相関している。Putnamはコミュニティへの関与が男女平等に対してオープンになると述べたが，コミュニティへの関与はジェンダー問題には関連せず，むしろ性別役割分業にあてはまらない活動をすることと関係するものと思われる。

5　結論

これまでの分析から次のことが明らかになった。

まず，豊かなSCから多くの利益を得ているのは女性の方である。男性は女性と異なり，SCではなく階層変数と家族内SCが満足感，健康，娯楽活動, 市民意識などに関連している。男性にとっては個人の属性要因と家族が資産である。女性では個人と家族に加えネットワークが資産である。ColemanやPutnamはSCを持たざるものの資本とし，他の資本を補填する可能性を論じたが，女性が公的領域で不利な地位におかれることで受ける損失をネットワークや密な家族を構築することで埋め合わせていると解釈できるかもしれない。この結果は，本稿での従属変数が満足感や娯楽，個人の市民意識などであり，いわばインフォーマルな領域での利益に比重がおかれていることに起因するともいえる。なお，２つの型のSCのうち，女性にとって結束型SCは両義的である。それは生活満足感を高め，市民意識を醸成するのに貢献しているが，健康についてはマイナス効果も示している。それに対し，橋渡し型SCは主にプラスの利益をもたらしている。

家族要因との関係に注目すると，家族内SCは男女とも多くの面でプラスの効果をもたらしている。密な家族は孤独感を防ぎ満足感を高め，娯楽活動を推進し，女性の市民意識醸成にも関係している。E. Bottはその古典的な研究で都市の家族は「孤立しているのではなく，閉鎖的なコミュニティの家族に比べると，高度に個化しているのである」（Bott 1955=2006：87）とし，家族内の関係と外部で取り結ぶ社会ネットワークとの関連を分析した。本稿の分析結果で，家族関係が密な方が地域ネットワークや親族関係が強化されるだけでなく，個人的な活動や橋渡し型ネットワークも促進されているのをみると，確かに家族は孤立しているのではなく，家族内SCを用いてネットワークを広げている一面が見える。いわば密な家族は排他的になるのではなく，多様なネットワークをつくり利益をもたらす，すなわちつながりがつながりを生み出すまさに資本としての性質をもっていることがいえる。

ただし，密な家族といった場合，それは女性のケア活動への大きな貢献を意味するのではない。ケア活動関連時間は今回の分析ではほとんど効果を示さなかった。密な家族というのは本論では家族内SCの多い家族であり，家族員と「共に同じ行動をする」ということを指している。これは分離型でなく協力型の家族関係により適合するものと考えられる。

ケア活動が分析で関連を示したのはそれが女性の橋渡し型SCの構築を阻害する点である。橋渡し型SCが女性にとってさまざまなタイプの利益をもたらしていたことをふまえると，ケア活動はやはり女性個人の利益を得る上で負担となっている側面がある。

以上，家族要因を導入してジェンダーとSCの関係について考察してきた。SC論というのは基本的にSC量が多い方がよいという前提にたち，それを増やすための政策が訴えられる。しかし，それが自由や平等の問題と両立するためには，SCが誰に対してどのような利益をもたらすか，について注意をはらう必要がある。家族とSCの関係をみると，ColemanやPutnamといったSC研究者が，密な家族を称揚しそれがもたらす利益を主張したのも理解できる。しかし，家族内SCを

増やすという提案は男性にはプラスの利益をもたらすことが多いが，女性の場合には家庭内で女性が置かれている権力作用を考慮し，橋渡し型SCを阻害しない形ですすめることが必要である。

注

（1）ジェンダーがSC研究にもたらした知見は大きくわけて構造的な側面を明らかにする研究と権力作用を明らかにする研究とがある（杉原2013）。特に，権力作用については前項で述べたように，女性の所有するSCが私的財として他の資本に転換されない型である現状が指摘されてきた。その原因は，女性がケア役割を担う社会の仕組みによるところが大きい。

（2）なお，これらの調査は日本学術振興会科学研究費（課題番号23530656,26380674）の助成をうけて行ったものである。

（3）表３の家族は必ずしも同居家族を含んでおらず，別居家族も含む回答だと思われる。そこで相談先・頼りにしている家族は家族内SCにいれずに結束型SCに含めた。家族内SCは同居している家族に限定したSCとする。

（4）学歴変数は，中学卒=９，高卒=12，短大・高専卒=14，大学・大学院卒=16とリコードしたものを用いる。

（5）「経済的に余裕ある暮らしができていると思いますか」という質問に４段階で回答してらった。「そう思う」=４，「まあそう思う」=３，「あまりそう思わない」=２，「そう思わない」=１とリコードしたものを用いる。

（6）「全体的に」「家庭生活に」「地域生活に」「仕事に関して」「個人の趣味や娯楽などに」の５項目について「満足している」から「満足していない」まで４件法でたずね，その回答を４～１にスコア化した。主成分分析を行ったところ一つの因子だけが抽出され，すべての項目についてプラスの得点を示すことからその主成分得点を満足感の指標とした。

（7）内閣府『平成23年度版　高齢社会白書』

（8）男女の分業を問う質問は「男性は外で働き女性は家庭を守るべきか」，男女の権力作用を問う質問は「公的なところで重要な決定をする仕事は女性より男性に適している」（新潟市），「責任ある仕事は女性より男性が向いている」（世田谷区）である。二つの地域で調査票が異なるため質問が異なるが，同じジェンダー関連の質問ということでそれぞれ賛成から反対までを段階に応じて４－１とスコア化し，総和したものを性別役割意識の指標とした。

参考文献

Bezanson, K.(2006) Gender and the limits of social capital, *Canadian Review of Sociology and Anthropology*, 43(4), pp. 427–443.

Bott, E. (1955) Urban Families: Conjugal Roles and Social Networks, *Human Relations* 8, pp. 345–384.（=2006，野沢慎司訳「都市の家族――夫婦役割と社会的ネットワーク」野沢慎司編・監訳『リーディングス　ネットワーク論――家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房，35–91頁.）

Bourdieu, P. (1986) The Forms of Social Capital, in *Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education,* ed. J.G. Richardson, Greenwood, pp. 241–258.

――― (1990) La Domination masculine, *Acts de la recherché en sciences social*, 84, pp. 2–31.

Coleman, J.S. (1988) Social Capital in the Creation of Human Capital, *American Journal of sociology*, 94, S95–S120.（=

2006，金光淳訳「人的資本の形成における社会関係資本」野沢慎司編・監訳『リーディングス　ネットワーク論――家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房，205–238頁.）

――― (1990) *Foundations of Social Theory*, Harvard University Press, 1014p.（＝2004，久慈利武監訳『社会理論の基礎（上）』青木書店.

Farr, J. (2004) Social Capital: A Conceptual History, *Political Theory*, Vol. 32 No.1, pp. 6–33.

Field, J. (2008) *Social Capital* (second edition), Routledge, 208p.

Kitty, E.F. (1999) *Love's Labor: Essays on Women, Equality and Dependency*, Routledge, 256p.（＝2010，岡野八代・牟田和恵監訳『愛の労働あるいは依存とケアの性議論』白澤社.）

Lowndes, V. (2006) It's Not What You've Got, But What You do With it: Women, Social capital, and Political Participation, in *Gender and Social Capital*, eds. B. O'Neill and E. Gidengil, Routledge, pp. 213–40.

O'Neill, B. and E. Gidengil (2006) *Gender and Social Capital*, Routledge, 432p.

Portes, A. (1998) Social Capital: Its Origins and Applications in Modern Sociology, *Annual Review of Sociology*, Vol. 24, pp. 1–24.

Putnam, R.(2000) *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community,* Simon & Schuster, 545p.(＝2006，柴内康文訳『孤独なボウリング―米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房).

杉原名穂子（2013）「認知的・構造的社会関係資本とジェンダー問題」『人文科学研究』新潟大学人文学部, 133, pp. 21–41.

Woolcock, M.(1998) Social Capital and Economic Development: Toward a Theoretical Synthesis and Policy Framework, *Theory and Society*, 27, pp. 151–208.